



今、倶知安ヒラフ地区で自転車が大人気なのを知っていますか？自転車ユーザー（サイクリスト）は年々増加し、町内外を問わずに自転車に乗ってる人をよく見かけます。サイクルイベントも盛んに行われています。じゃが祭りと並行して開催されたニセコ HANAZONO ヒルクライムや、羊蹄山を一周するネイチャーライドニセコ、9月14～16日に開催されたツール・ド・北海道など、国際的な大会も多く開催されています。

羊蹄山麓エリアのサイクリングコースは豊かな自然に囲まれています。道路の信号機が少なく、長い距離を止まらずに走れることも評価が高く、様々なサイクルイベントにおいてもサイクリストの満足度の高さに繋がっています。今回の特集では、倶知安で開催されている大会の魅力や、倶知安における自転車の魅力に迫っていきます。

今年の自転車シーズンは終わりが近づいていますが、来年になればまた自転車の季節がやってきます。これを機会にサイクリストになってみませんか？



ニセコHANAZONOヒルクライム& ネイチャーライドニセコ

一 セコHANAZONOヒルクライム(以下ニセコヒルクライム)は、

倶知安ニセコエリアで本格的な自転車ロードレースを開催したいという人たちの想いから始まりました。倶知安じゃが祭りによりの多くの人が集まることを願い、じゃが祭りの日に併せて開催しています。「まちの駅ぶらっと」前をスタートして、五色温泉を目指し山を登っていきます。4回目を迎えた今年は、593名の選手が参加しました。

一般にヒルクライムレースは接触や集団落車の危険が少なく、下りがないため安全な競技です。自分のペースで走ることができるので、自分の努力次第で成績を伸ばすことができるのが魅力です。

登りきった時の達成感も魅力の一つです。ゴールした選手は息も絶え絶えですが、「気持ちいい!」と言う人が大勢います。自己への挑戦で翌年も参加するリピーターや、大会を見て新たにニセコヒルクライムに挑戦する町民も増えています。

北海道では道路を全面通行止めにして行うロードレースが少なく、ニセコヒルクライムはこの点でも本格的な大会として満足度が高い要因となっています。



ネ イチャーライドニセコ

は、倶知安・羊蹄山麓でのサイクリングを楽しまれる観光客と、地元サイクリストとの交流を図り、一緒に楽しむことでこのエリアの魅力を感じてもらうという想いで開催されました。コースの種類が多く、短いもので20^分、最長で200^分のコースがあり、大人から子どもまで一緒に楽しめるサイクリングイベントです。130名の選手が参加しました。関東圏や関西を中心に道外からの参加者もいます。



ネイチャーライドニセコには、地元サイクリストが大勢参加します。これは何十年も前にサイクルチームを作り、羊蹄山の周りでサイクリングを楽しまれた先人たちがいることが一つの理由になっています。町外から移住した方に自転車愛好家が多いのも理由の一つです。地元サイクリストと一緒にサイクリングを楽しむことで、このエリアの魅力をもっと深く感じることが出来ます。参加者にとって、「地元サイクリストによるガイド」はとても評価が高いです。また、国内でもサイクリングコースとして人気の高い羊蹄山麓エリアがコースになっていることも大きな魅力です。

サイクリングが好きな人

誰もが楽しめるスポーツ「自転車」。その魅力とは何なのか? 倶知安で自転車が盛り上がりつつあるのは何故なのか? ニセコヒルクライム実行委員会事務局長で、自身もサイクリストである木村氏が語る自転車の魅力をご紹介します。

自 転車に本格的に乗り始めたのは、26年前でした。競輪選手から自転車を手放すも、短い距離から始め羊蹄山一周。休日には長くても80^分ほどでした。その年に行われたツール・ド・北海道市民レースに出場し、ロードレース初参戦となりましたが、落車に巻き込まれて転倒してしまいました。何とか完走したものの、集団でのレースが怖くなり、その後はトリアスロンへと変わっていききました。

私の周りでロードレースに出る人が増え始めて、またロードレースに出るようになりました。今は、チームニセコに所属してレースに参戦しています。

チームニセコでは自転車好きの人が集まっています。年齢差がありますので、練習会ではコースやスピードは違いますが、練習会の後のBBQでは、年齢や遅い速いに関係なく楽しんでいます。大会では、ほとんどの参加者はホテルに泊まりますが、私たちだけは毎回キャンプを楽しんでいます。

同じ楽しみを共有することで仲間意識が生まれます。仲間たちと共にレースに参加することで、また多くの人と知り合い、人の輪が広がっていきます。誰もが乗ったことのある自転車だからこそ、誰でも繋がることができる。それが自転車の魅力です。

倶 知安をはじめとする羊蹄山麓エリアの魅力は、走行環境が素晴らしいことです。恵まれた自然環境の中では、色々な景色と出会えます。普段何気なく見ている羊蹄山も、自転車で乗りながら見るとまた違って見えます。特に国道393号線を走っている時に見える羊蹄山は、倶知安でも特に綺麗に見える場所だと思えます。



走行コースの方でも様々な魅力があります。山に囲まれた倶知安周辺は、起伏が多く苦しい時もあります。しかし、登りきった後の下り坂では楽もできます。自動車の通りが少ないコースなどの選択も容易にできるので、安全に走ることが出来ます。

多様な自然、多様なコース。魅力たっぷりの倶知安町に訪れるサイクリストは年々増えています。きっと彼らは私たちより多くの場所・楽しみ方を知っているから倶知安町に来てくれるのだと思います。自転車は、速く走ってもゆっくり走っても、一人で走っても大勢で走っても楽しめるスポーツです。これからもっと自転車で乗る人が増えて、みんなで盛り上げていきたいですね。自転車で興味のある方は、チームニセコ木村までご連絡ください。一緒に楽しみましょう!

(木村俊一氏)



TOUR DE HOKKAIDO 2013

日本最大級の自転車ロードレースであるツール・ド・北海道2013が、9月14日〜16日に開催されました。ヒラフスキー場を発着場として、3日間のレースが展開されました。

ステージレースと市民レースの2種類があり、ステージレースは20チーム計100名の選手が参加し、計428kmを走りぬぎました。市民レースの参加者には中学生や女性も多く、3日間で延べ1300人もの選手が参加しました。

大会中は残念ながら晴天とはいきませんでした。雨の降る中でのレースとなった日も多くありましたが、発着場をはじめ各所で多くの方が応援し、大会を盛り上げてくれました。



▶大勢の観客に見守られてゴールする選手

今大会最大標高地点(831m)を含む最長コース

1 日目のステージレース

は、3日間の中で最も長い180kmです。ヒラフスキー場前を出発し、共和町、蘭越町、ニセコ町、真狩村などを走り抜きました。途中にある標高831mのチセヌプリ峠は、今大会でも最大の標高で、選手の前に立ちました。雨の降る中でのレースとなりました。終盤は喜茂別町、京極町を抜け、羊蹄山を一周した後ヒラフスキー場へと戻るコースとなりました。

市民レースは、ヒラフスキー場を出発する85kmコースと、共和町を出発する50kmコースの2種類がありました。

どちらのレースも高低差があり、特にゴール直前の上り坂は、長い距離を走ってきた選手にとっては最後の難関となりました。観客も応援に力が入り、大きな声援を送っていました。

開会式の際には降っていた雨も、レース開始時には止んでいました。選手にとって



▲レルヒ公園前を疾走!



▲大会開始の号砲を受け、走り出す選手たち

も観客にとっても、大いに盛り上がるレースの初日となりました。

激しい雨の降る中駆け抜けた海岸線

風を受けながら海岸線を走るレース

2日目。ステージレースはヒラフスキー場を出発、共和町を通り泊村、神恵内村の海岸線を走り、Uターンする全長132kmのコースです。初日の成績を受けて、それぞれの選手が戦略を持って臨んでいます。2日目のレースを重要視している選手・チームも多く、初日同様熱いレースとなりました。



▲悪路の中勢よく駆け抜ける選手

市民レースは、神恵内村を出発し、海岸線を走りながら倶知安町を目指す67kmのコースでした。

2日目は朝から激しい雨が降り、その中のレースということもあり、途中アクシデントも起き、落車する選手も出ました。そんな悪天候の中にもかかわらず、多くの人が沿道で応援してくれました。



▲ゴール直前の上り坂を勢よく駆け上がりました

2日目もゴール直前は上り坂です。2日間レースを繰り返した選手たちは疲れの色

も見せずに、全力で駆け上がりました。その姿に沿道は「すごい!」「さすが!」という感動の言葉で溢れていました。

最終ゴールへと向かう大会最終日

ツール・ド・北海道2013もいよいよ最終日。ステージレースはヒラフスキー場を出発し、赤井川村、仁木町を経て小樽市へと向かう116kmのコース。毛無峠の難所は坂を一気に下り、最終順位を競うレースとなりました。

市民レースは、札幌市モエレ沼公園においてクリテリウム(短いコースを周回するレース)を実施。幼児や小学生も参加でき、賑やかなレースとなりました。最終日も雨が降りました。3日間を通してすっきりしない天気となりましたが、選手に焦りや不安は見られませんでした。日々練習に励み、様々な環境において最高のパフォーマンスを見せる努力を積んできたことがうかがえました。



▲雨の中の疾走。最後に栄光を掴むのは誰か?

充実した表情でレースに臨む選手たち。雨の中でも集まった大勢の観客たち。選手と観客の一体感のもと、大会は熱く盛り上がりました。誰もが乗る自転車だからこそ、多くの人が面白さを感じることができ、選手と観客と一緒に大会を作り上げていく様子に、自転車という乗り物の魅力を感じました。